

はくさん

特集 白山登山道のあゆみ

第45巻 第1号



目次

- P 1
旧白山温泉
- P 2
白山登山道のあゆみ
- P 6
登山道に見る白山の
歴史
榎 典雅
- P12
白山のために一登山
道整備を通して—
永井富三夫
- P16
センターの動き

旧白山温泉（市ノ瀬、昭和初期）

白山へ連なる古道、越前禅定道は市ノ瀬から柳谷川を渡り、湯の谷川左岸部から六万山を目指して本格的な山道に入ります。この六万山のふもとには昔、温泉場がありました。

白山をめぐる争論を経て、近世後期に白山の支配権を確立した越前の平泉寺は、当地に役所を設置、直営の温泉施設を経営し、登拝者から入浴料や入山料を徴収していました。白山登山の行き帰りに当地が宿泊場所として利用され、江戸時代の武士や文人の紀行文には、当地の様子が紹介されています。温泉で登山の疲れをいやす風習は昔から変わりありません。

明治以降に民営施設となった後も当地は白山の登山基地として賑わいました。写真は、昭和初期の温泉場（白山温泉）を写したもので、旅館2軒とその別館、白山の砂防工事労働者を対象とした雑貨屋、登山口には大鳥居がありました。残念なことに昭和9年7月11日の手取川大洪水で、そばを流れる湯の谷川の氾濫及び土石流により、温泉場は一晩で流され、埋まってしまいました。

（写真提供：白峰小学校・文：小川弘司）

白山登山道のあゆみ

・人々の生活を守る守護神としての白山、地域の土着信仰。

鎮座地

御前峰

別山

大汝峰

奈良時代

・養老元年(717) 越前の僧、泰澄が白山を開くと伝える。
〔元亨釈書〕〔泰澄和尚伝〕

平安時代

・天長9年(832) 白山に加賀・越前・美濃馬場が開か

後期に加賀禅定道、越前禅定道、美濃禅定
—修行僧による登拝



越前の僧、泰澄（林西寺所蔵）

鎌倉から室町時代

本地垂迹説に
—禅定道の
—宿泊施設
—周辺の峰

古代から中世の白山禅定の世界（白山山頂出土遺品などから）

・山頂祭祀の開始（9世紀後半頃）

- 9世紀後半頃の美濃産の灰釉陶器瓶や鐘鈴（写真）が出土。
 - 当時は、簡単な祭壇に供物を供え、鈴を振り鳴らして神仏を招喚する儀礼。
 - こうした状況が11世紀頃まで続く。
- ※限られた修行僧による登拝行。

・本地垂迹説に基づいた登拝行（12世紀以降）

- 八稜鏡、十一面観音立像（写真）などが出土。
 - 神祇信仰に基づく納鏡が行われるとともに本地垂迹説に基づいた仏教的世界観による登拝が行われる。
 - 経塚が造営され、花鳥唐草文が彫られた優品の金銅製水滴も出土。
 - 山頂儀礼として納経が行われ、経塚に水滴などの副納品が収められた。
 - 御正体と呼ばれた懸仏（13世紀）の出土、越前室の火処の発見。
- ※12世紀になると山頂は仏教的世界に彩られ、経塚の造営や密教的な修法が盛んに行われていた。
- ※多くの行人の登拝を可能にする白山禅定道が本格的に整備、山頂に神仏をまつる施設や室（宿泊所）が設置。

・周辺山岳での修行（13世紀後半以降）

- 主峰への登拝が定着すると、周辺の峰々にも行場が広がる。
 - 妙法山（1,775 m）金銅製の経箱出土（13世紀頃）。
 - 三方岩岳（1,736 m）加賀岩から青白磁水注（13世紀）。
 - 笈ヶ岳（1,841 m）経筒、仏像、刀剣類（13、14世紀）。
 - 笥笠中宮神社に伝わる行人札（写真）。百余日の修行を終えたことを記念し奉納。また、熊野系修験者が東西各地から来訪。
- ※周辺の峰々を縦走する修験的な山岳鍊行が、東西各地から集まった行人により行われていた。



鐘鈴（白山比咩神社所蔵）
御前峰から出土。9世紀頃。



十一面観音立像（白山比咩神社所蔵）
転法輪窟から出土。12世紀。

本地垂迹説に基づく白山の神・仏

現身（俗体）	神名	真身（本地仏）
貴女	イザナミノミコト（垂迹説） ／妙理大菩薩（仏教的）	十一面観世音菩薩
弓（銀）矢（金）を持つ宰官	小白山別山大行事（仏教的）	聖観世音菩薩
老翁	大己貴（神）（垂迹説）	阿弥陀如来

れると伝える。〔白山記〕

※本地垂迹説

仏が人々を救うために、神の姿となって現われる神仏習合の考え方。

道の成立

基づいた仏教的世界観に基づく登拝
登拝が本格化
としての室の設置
々にも行場

代

東西各地の修験者が来訪。百余日の修行などを行う
—山岳修験の道場として盛行

江戸時代

- ・寛文8年(1668) 江戸幕府、白山麓18カ村を幕府領とする。
- ・寛保3年(1743) 江戸幕府、白山山上3社を越前平泉寺の管轄とする。

山岳登拝の多目的化 —信仰修行目的以外の武士、学者、文人による登山

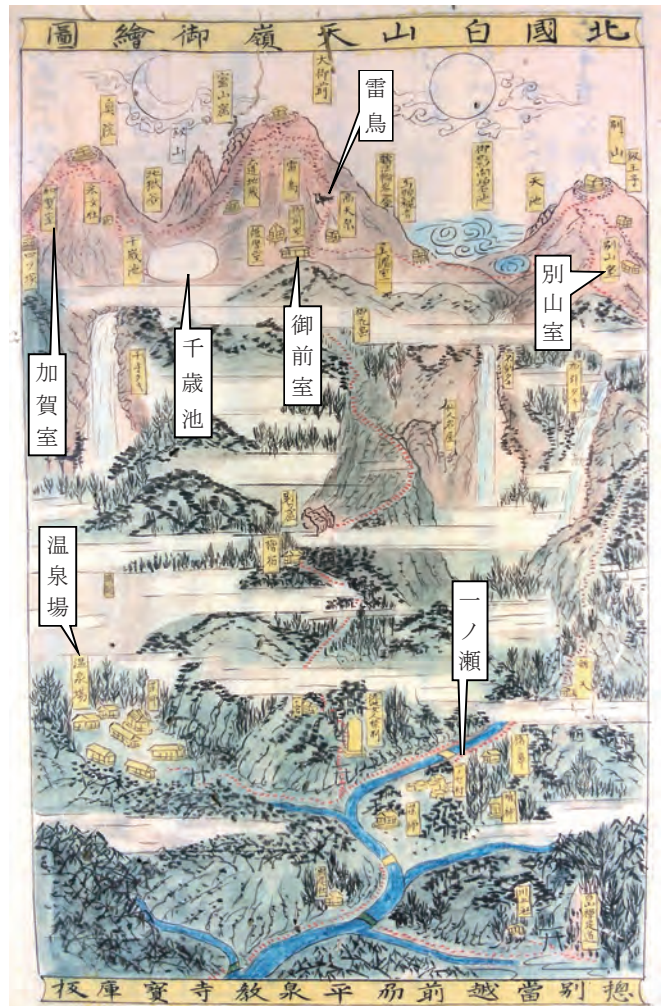
- ・越前禅定道の回遊道として別山道（市ノ瀬—御舍利山）開設。
- ・小原集落を經由するルート、谷峠を超え牛首・風嵐を經由する牛首道が一般的となる。
- ・旧平瀬道（飛驒道）開設。

江戸期の武士、学者、文人による登山

- ・宝暦10年(1760) 京都の文人池大雅、白山に登る。〔三岳紀行図〕
- ・天明5年(1785) 鶴来の儒学者金子有斐（鶴村）、尾添口から白山に登る。〔白山遊覧図記〕
- ・文化10年(1813) 大聖寺藩士小原益（氏益）、平泉寺・牛首を経て、市ノ瀬から白山に登る。〔白山紀行〕
- ・文政5年(1822) 紀州和歌山藩士（医者・本草家）畔田伴存、採薬登山のため、市ノ瀬から白山に登る。〔白山草木志〕

行人札（筭笠中宮神社所蔵）

行人が、白山で百余日修業した記念に奉納したもの。文明16(左)、17(右)年。15世紀。



北國白山天嶺絵図（玉川図書館近世史料館所蔵『白山史』）
平泉寺が登拝者へ販売した絵図。江戸後期の山頂部や越前禅定道の姿が伺える。主な地名を示す。

明治時代

近代登山の黎明

- ・明治4年(1871) 外国人が初めて白山に登る(アメリカ人グリフィス)。
- ・明治5年(1872) 白山及び白山麓18カ村、石川県の管轄となる。
- ・明治5年(1872) 太政官告布により、女人の登山禁制が解かれ、鳥取の女性初めて白山に登る。
- ・明治6年(1873) 白山山頂の社殿を平泉寺から白山比咩神社の奥宮
- ・明治7年(1874) 神仏分離令に基づき白山山頂に安置されて並びに登山道沿いの石仏の破壊などが行わ
- ・明治半ば～ 加賀地方の平野部農村の若衆による白(～昭和初期)。
- ・明治42年(1909) 金沢歩兵第7連隊約千
- ・明治末期 学校の集団登山、スポー



明治末期ごろの室堂

大正時代

- ・大正8年(1919) 金
- ・大正9年(1920
- ・大正10年
- ・大正

進む登山道の整備

明治	末期	平瀬道(平瀬-大白川-大倉山-室堂)⇒旧平瀬道(廃道)
		岩屋俣道(市ノ瀬-岩屋俣谷-別山平)⇒別山道(廃道) ※現在(廃道)
大正	10年(1921)	岩間道(岩間温泉-小桜平-四塚山)⇒加賀禪定道(尾添-四塚山) 廃止
	末期	砂防新道(市ノ瀬-別当出合-黒ボコ岩)
昭和	5年(1930)	釈迦新道(市ノ瀬-白山釈迦岳-四塚山、営林署により)
	9年(1931)	加賀禪定道(尾添-四塚山) 復活⇒岩間道(廃止(昭和9年水害により)) 砂防新道(不通(昭和10年まで)、越前禪定道(別当坂-殿ヶ池間(廃道(昭和9年水害により)))
	10年(1935)	中宮道(中宮温泉-ゴマ平-翠ヶ池、営林署により)
	20年(1945)	岩間道復活⇒加賀禪定道(尾添-四塚山) 廃止
	24年(1949)	観光新道〔別当出合-(別当の大崩れ下)-殿ヶ池〕⇒越前禪定道(市ノ瀬-殿ヶ池) 廃道
	26年(1951)	鳩ヶ湯新道(鳩ヶ湯-六本檜-三ノ峰)⇒旧道(刈込池-二ノ峰) 廃道
	30年(1955)	楽々新道(岩間温泉-小桜平)
	36年(1961)	越前禪定道(六万山-別当坂間) 廃道(北美濃地震により)
	37年(1962)	青柳新道(白峰-砂御前山-釈迦岳分岐) ※現在(廃道) 北縦走路(荻町-三方岩岳-野谷荘司山-ゴマ平)
	38年(1963)	湯谷新道(釈迦岳分岐-室堂) ※現在(廃道)
	39年(1964)	エコーライン(南竜ヶ馬場-弥陀ヶ原-五葉坂)
	42年(1967)	展望歩道(南竜ヶ馬場-アルプス展望台-平瀬道分岐)
	43年(1968)	別山道(市ノ瀬-御舍利山) 復活
	49年(1974)	観光新道変更(別当出合-別当坂-殿ヶ池(別当の大崩れ下(廃道)経由))
62年(1987)	加賀禪定道(一里野-檜新宮-四塚山) 復活(ハライ谷(経由)使用せず)	
平成	11年(1999)	越前(白山) 禪定道(市ノ瀬-六万山-慶松平-別当坂) 復活
	19年(2008)	越前(白山) 禪定道(小原峠-三ッ谷) 復活



【参考文献】
「財団法人白山山」「白山山」「白山山」「白山の」「白山」「歴史の

が、女性として初

とする。

いた仏体の下山、
れる。

山詣りが盛んとなる

名、白山集団登山。

ツ登山がはじまる。



**北陸女学校（現北陸学院）生徒による
白山登山（昭和7年7月）**

スカートをはいて、室堂で記念撮影を
している。



別当出合休憩舎のゴミの山

登山者の増加とともに、ゴミがあふれ、
お花畑までゴミが散乱する山となった。
昭和48年からゴミ持ち帰り運動を推進
し、ゴミ袋の配布やゴミ箱の撤去など
を行い、ゴミ持ち帰り運動は定着。ゴミ
の少ない山として評価されるようになった。

沢第二高女・女子師範学校、白山初の女子団体登山を行う。

）第四高等学校生、残雪期に白山に登る。

（1921）金沢医学専門学校生、白山山系初縦走。金沢の青年団、白山で遭難。

13年（1924）第四高等学校旅行部、白山で最初のスキー登山を行う。

和時代

戦後、登山のレジャー化、白山国立公園の指定一保護と利用

- ・昭和3年（1928）第四高等学校旅行部、白山から奈良岳縦走。
- ・昭和4年（1929）第四高等学校旅行部、別山から地獄谷踏査。
- ・昭和9年（1934）手取川大水害。市ノ瀬・白山温泉壊滅。
- ・昭和28年（1953）白山室堂に白山診療所設立。
- ・昭和30年（1955）白山、国立公園に指定。
- ・昭和37年（1962）白山、国立公園に昇格。
- ・昭和48年（1973）白山でのゴミ持ち帰り運動はじまる。
- ・昭和55年（1980）浩宮徳仁親王殿下（現皇太子殿下）白山に登る。



**室堂ビジターセンターリニューアル
オープン（平成14年5月）**



**別当谷からの土石流で
破壊された別当出合の
吊橋（平成16年5月）**

平成時代

- ・平成14年（2002）室堂ビジターセンターリニューアルオープン。
- ・平成16年（2004）5月、別当谷の土石流により別当出合の吊橋流出。7月に新吊橋開通。
- ・平成19年（2007）別当谷での山腹崩壊により砂防新道ルート付替。

【献】
人白山観光協会創立50周年記念誌（財団法人白山観光協会、1998）
系の秘史シリーズ（そのI）（松田亮治、石川郷土史学会々誌第30号、1996）
頂遺跡（石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化センター、2006）
地へのまなざし（石川県立歴史博物館、2007）
歴史（下出積興、1999）
山の旅 明治・大正篇（森坂洋晴編、2010）
道調査報告書 第5集 信仰の道（石川県教育委員会、1998）

登山道に見る白山の歴史

梶 典雅（白山自然保護センター）

長い信仰の歴史がある白山に人が登るようになってから、すでに千年を超える歳月を数えます。現存する登山道の中にも、はるか昔から人々に歩かれてきた道があります。そこを歩くとき、私たちは当時の人がなにを考え、なにを感じて歩いたのかと思いをはせ、あるいはなにか不思議な感覚にとらわれることもあるのではないのでしょうか。登山道の歴史を知ることで、白山がより身近に感じられればと思います。

白山禅定道

白山に登るための道が、いつ頃、どのような形で作られたのかについては、明確なことはわかっていませんが、まず頭に浮かぶのは、白山比咩神社（石川県白山市）に伝わる『白山記』（『白山之記』）です。この古文書は、長寛元年（1163）にできたとされていますが、次のようなくだりがあります（原文は漢文）。

「天長九年 ^{みずのえね}壬子、三方の馬場を開いて、^{すなわち}即三方の馬場より御山に参詣・・・」

ここでいう「馬場」とは、信仰・登拝の拠点と考えられており、「三方」は越前、加賀、美濃にほかなりませんから、それぞれ現在の平泉寺白山神社（勝山市）、白山比咩神社（白山市）、長滝白山神社（郡上市）がそれに当たります。また、『白山記』の冒頭には、「その山頂を禅定と名づけ」とあるので、馬場と山頂を結ぶ登拝道は「禅定道」と呼ばれています。なお、「禅定」は辞書によると、①精神を集中し寂静の境地に入ること、②行者が霊山に登って行う修行、③霊山の頂・絶頂、といった意味があるようです。

いずれにせよ、白山山頂一帯には、平安時代の9世紀後半からとみられる遺跡・遺物が確認されているので、天長9年（832）頃に各禅定道が開かれていたと解釈しても大きな齟齬はないと思われます。



写真1 越前馬場「平泉寺白山神社」

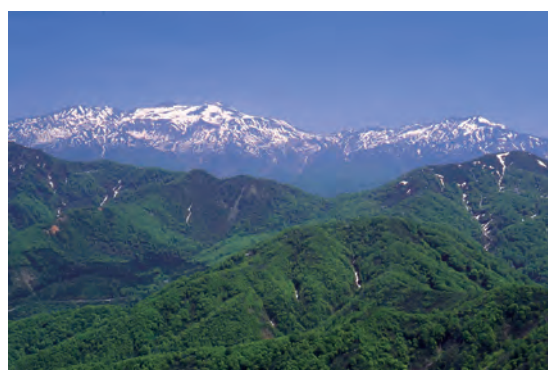


写真2 法恩寺山・伏拝付近から望む白山
手前の稜線の一番低いところが小原峠

禅定道のルートは、異論もあり、時代によっても変わりますが、最も一般的に言われているのは、以下のとおりです（図参照）。

<地名：現代の表記、---：概ね現存、===：改変または付替、+++：廃道>

●越前禅定道

平泉寺白山神社 --- 法恩寺山 +++ 和佐盛 ===（林道終点）--- 小原峠 --- 三ツ谷 === 市ノ瀬 ---
六万山 --- 慶松平 --- 別当坂 --- 黒ボコ岩 --- 弥陀ヶ原 --- 室堂 --- 御前峰



図 白山の禪定道・登山道概略図

●加賀禪定道

白山比咩神社 === 佐良 === 中宮 === 尾添 (一里野) === ハライ谷 === 檜新宮 --- 長倉山 --- 美女坂 --- 天池 --- 四塚山 --- 大汝峰 --- 御前峰

●美濃禪定道

長滝白山神社 === 桧峠 === 石徹白・白山中居神社 === いとしろ大杉 --- 神鳩ノ宮 --- 銚子ヶ峰 --- 一ノ峰 --- 二ノ峰 --- 三ノ峰 --- 別山 --- 南竜ヶ馬場 --- 御前峰

禅定道の変遷と現状

白山に登る道では最も古く、白山という山の特徴を最も良く表している禅定道がどのように変化し、現在に至っているのか、大まかにみていくことにします。

<越前禅定道>

三禅定道の中で最短のこの道は、平泉寺の境内からすぐに山道となり、三頭山^{みつがしら}の先から法恩寺山にかけては、林道やスキー場など著しく開発されているものの、ほぼ古道に沿った山道を歩くことができます。法恩寺山の北東峰^{ふしおがみ}「伏拝」(1,360 m)から滝波川支流弘川の間は廃道状態で、その先も林道によって古道は分断・改変されていますが、林道終点(赤兎・大長山登山口)から県境の小原峠までは禅定道が残っており、小原峠には石仏も安置されています。峠から西俣谷沿いの工事作業道終点の間は、平成19年(2007)に復元整備され、途中には三ツ谷出身の有志らが昭和63年(1988)に再建した「川上御前社」の祠があります。作業道終点から三ツ谷を経て市ノ瀬までは車道になり、古道は確認できません。また、江戸期以降は、現在の国道157号沿いの木根橋から小原集落を経て小原峠に至るルートがとられ、さらには県境の谷峠を越えて、白峰から市ノ瀬に至る牛首道が主となり、禅定道は次第に使われなくなりました。

市ノ瀬から六万山・指尾・慶松平を経て殿ヶ池に至る尾根道は、別当出合からの登山道整備や北美濃地震(昭36年)による崩壊などで、廃道と復活を繰り返してきました。平成11年(1999)に県が環境庁(当時)の補助を受けた「緑のダイヤモンド計画」事業により、市ノ瀬から別当坂間を復元して以来、市ノ瀬から室堂・御前峰まで、ほぼ禅定道をたどることができるようになりました。

なお、別当出合から殿ヶ池(後に別当坂経由に付替)を経て黒ボコ岩に至る道を観光新道と呼んでいますが、これは昭和24年(1949)に、財団法人白山観光協会が設立を記念して整備したもので、それが名の由来と聞いています。



写真3 石仏が残る小原峠



写真4 筥笠中宮神社(白山市中宮)

<加賀禅定道>

たいへん長い道ですが、全体のおよそ半分にあたる中宮^{おぞう}・尾添までは、手取川及び尾添川に沿った道で、後半の山道とは大きく異なり、ほとんどが国道などになっています。しかし、沿線・近辺には獅子吼(昔は止宿? 宿は行場のこと)や板尾の不動滝^{しゆく}・宿ノ岩、白山別宮神社や佐良早松神社など、修験や白山信仰に関わる遺構・史跡が数多くあり、興味をそそられます。また、中宮はその名の通り絶頂までの中間の宮で、修験の行場であった^{おいする}笈ヶ岳(1,841 m)にも近く、多くの社堂が立ち並ぶ信仰の拠点であったとされています。現在は、筥笠中宮神社がひっそりと往時を伝えています。



写真5 復元された檜新宮の祠
多くの行者が集まる修行の場であり、6棟あったとされる建物の礎石の一部が見られる。



写真6 檜新宮から先での白山の展望

中央奥から右へ大汝峰、七倉山、四塚山、中央左は清浄ヶ原。



写真7 石垣が残る天池室跡

昔の宿泊施設であり、御手水鉢付近にあった加賀室が廃絶した19世紀以降には、加賀室とも呼ばれた。

尾添から先の禅定道は、江戸期以降、次第にさびれていったと思われます。その理由は、白山の支配権をめぐる越前側との争論に敗れたことや、白峰側からのアクセスが良くなったことなどによると考えられます。昭和9年(1934)の手取川大洪水で岩間道が不通になったことにより、一時的に復活したものの、昭和20年(1945)以降、廃道状態が続いていました。昭和62年(1987)に県がしかり場～四塚山間を復元整備し、現在に至っています。

なお、本来の禅定道は、ハライ谷で精進潔斎してこれを遡り、檜新宮に至るものですが、現在は尾根に付け替えられています。この「檜新宮参道」と一里野温泉スキー場からの「加賀新道」は、旧尾口村が整備したもので、日帰り登山にもよく利用されています。

<美濃禅定道>

この道も距離が長く、加賀禅定道と同様、中間地点に当たる石徹白上在所の白山中居神社を過ぎ、さらにその先の登山口までは、ほとんどが車道になっています。登山口からの道は、現在は石徹白道または南縦走路と呼ばれていますが、登山口から少し登ったところには「いとしろ大杉」(国指定特別天然記念物)や「今清水社跡」があり、ここからは、これまで連綿と歩き続けられてきた禅定道です。

また、修験華やかかりし頃には、禅定道とは別の行者道があったとされています。そのルートは、長滝白山神社から桧峠、大日ヶ岳(1,708m)を経て、尾根伝いに「神鳩宿」で禅定道に合していたとされています。現在、神鳩ノ宮避難小屋が建ち、小さな祠がある平坦地がその場所で、「神鳩社跡」と呼ばれています。なお、南竜ヶ馬場から室堂へは、トンビ岩コースと呼んでいる道が禅定道です。



写真8 白山中居神社(郡上市石徹白)



写真9 神鳩社跡



写真10 別山平からの別山
平の中央奥に御手洗池があり、別山室の石垣が残る。

別山・市ノ瀬道と旧平瀬道

禅定道に次いで古いのがこれらの道です。

別山・市ノ瀬道は、遅くとも江戸中期の1700年代には、ほぼ現在の登山道と同じルートが開かれていたようです。この道は、越前禅定道の回遊道としてよく利用されていたことが、多くの紀行文からうかがえます。当時、「三所権現」とされていた御前峰、大汝峰、別山に登拝すると、別山から禅定道に戻るより、別山北峰の御舍利山からチブリ尾根で市ノ瀬に下山したくなるのはよくわかります。なお、この道は明治期になると市ノ瀬から岩屋俣谷を遡って吹向尾根から別山平に至るルートに取って代われ廃道化します。次に復活して現在の道となるのは、昭和43年(1968)になってからです。

旧平瀬道も江戸期に歩かれていたことが、紀行文からわかります。しかし、現在の平瀬道とは異なり、平瀬から大白川沿いに遡る道にも難所があり、大白川温泉からは地獄谷を詰めて南竜ヶ馬場に達するという険路でした。天保12年(1841)、代官の命令で雷鳥を捕らえに行く話で知られる『山分衣』などに道の様子が書かれています。この道は、大倉尾根をたどる現在の平瀬道開設(明治末期?)以降、消滅しています。



写真 11 チブリ尾根からの別山
中央の高く見える峰が御舍利山



写真 12 平瀬道大倉山から御前峰と剣ヶ峰(右)

砂防工事や開発・調査による開設

現在、登山者の7割以上が登るとされる砂防新道は、その名の通り、元は砂防工事のための作業道でした。開削されたのは意外に古く、大正元年だとか。大正末期には市ノ瀬から別当出合、中飯場、高飯場(現在の甚之助避難小屋あたり)を経て、黒ボコ岩で越前禅定道に合流する道が利用されていました。昭和9年(1934)の手取川大洪水により、砂防新道や越前禅定道の一部が崩壊し、一時的に廃道になりましたが、すぐに復活したのは、水害の復旧など砂防工事を急ぐ必要があったからというもの、いかにもこの道ならではの経歴でしょう。

岩間道の開設は、大正10年(1921)であり、岩間温泉の整備と併せて、前年に起きた尾添村大火災からの復興を図るための開発・誘客が目的だったとされています。この道も昭和9年の大洪水で廃道となりましたが、昭和20年に復活しています。



写真 13 クロユリの群生地として知られるお花松原

本来は、ここより東のハイマツにハクサンシャクナゲが混生する場所に付けた名だという。

また、白山の山頂一帯から別山にかけては白山比咩神社有地ですが、大汝峰北の鞍部から北西は、林野庁所管の国有林です。昭和5年(1930)に釈迦新道、その5年後に中宮道が営林署によって開削されたのは所有地の現状把握ということもあったのでしょう。『なかお特集号 ふるさとの山』(1976)に記載された「白山北稜に行く」という記録には、距離を測りつつ大変な苦勞をして中宮道のルートを踏査し、ゴマ平から妙法山、三方岩岳(現、北縦走路)、さらに笈ヶ岳や奈良岳、奥三方山を越えて旧河内村に下山したと書かれています。現在使われている「お花松原」「北弥陀ヶ原」「もうせん平」などの地名を付けたことも記されています。



写真 14 妙法山 (1,775 m)

「宝物が埋蔵されている」と聞き及んでいた営林署の調査隊が山頂で腐食した銅の小箱(経箱?)を発見している。

国定・国立公園の指定とその後

白山は、昭和30年(1955)に国定公園に指定されており、その頃に楽々新道が開設されています。また、同37年(1962)に国立公園に昇格してからは、いくつもの登山道が造られました。

旧白峰村の青柳山から鳴谷山などを経て湯の谷乗越のつこしで釈迦新道あおやぎに接続する青柳新道が昭和37年に、湯の谷乗越から室堂に至る湯の谷新道(通称ワングル新道)が翌年にできましたが、鳴谷山登山道の部分を除いて、現在はほぼ廃道になっています。また、蛇谷おやだにの親谷の湯から国見山ふくべ・瓢箪山ひょうたんを経て三方岩岳きりぼれに至る道や、親谷の湯から霧晴峠ゆだにのかしら・湯谷頭を経て岩間の噴泉塔・元湯に至る探勝歩道が昭和39～41年にかけて開通しましたが、岩間元湯からの噴泉塔歩道(2017年現在、新岩間温泉～元湯間の崩壊により通行不可)を除いて、これらも廃道になりました。

一方、北縦走路(昭37)やエコーライン(昭39)、鳩ヶ湯新道(上小池～三ノ峰)及び六本檜～赤兎山間(昭40)、展望歩道(昭42)なども相次いで開設され、別山・市ノ瀬道が復活しました(前掲)。

その後は、前述した加賀禅定道や越前禅定道の復元以外には主だった変化は見られませんが、昭和48年(1973)に白川郷大窪の故大杉鶴平さんが開いた鶴平新道(馬狩～野谷荘司山)や、平成19年(2007)に地元有志が復活させた三ツ谷～杉峠間などが挙げられます。



写真 15 鳩ヶ湯新道六本檜

赤兎山・杉峠からの道と鳩ヶ湯新道が合流する。

こうしてみると、登山道の開設や消滅には、様々な要因や時代の背景があったことがわかります。白山と登山道の歴史に思いを巡らせ、大きな労力をかけ整備や維持がなされていることに感謝もしながら、白山の自然と歴史を楽しみたいものです。

【参考文献】

- 「失われゆく白山の自然」(久保信一, 1975)
- 「なかお 特集号 ふるさとの山」(山岳会グループ・ナカオ, 1976)
- 「白山紀行 近世の白山登山」(久保信一編, 1976)
- 「白山 山の旅 明治・大正篇」(森坂洋晴編, 2010)
- 「歴史の道調査報告書 第5集 信仰の道」(石川県教育委員会, 1998)

白山のためにー登山道整備を通してー

永井 富三夫（竹腰永井建設）

はじめに

昭和9年7月11日の手取川大洪水は、一夜にして市ノ瀬集落を飲み込み、廃墟となった市ノ瀬からは、登山者の姿が途絶えてしまうこととなりました。

市ノ瀬の住人であった永井喜市郎は、からくも一命をとりとめ、洪水で家族を失いながらも市ノ瀬に旅館（現永井旅館）を新築、また「白山強力組合」を設立し白山の登山復興に尽力しました。

この永井喜市郎を創業者に持つ竹腰永井建設は、現在も白山の登山道や施設整備に携わっています。

白山での仕事は、酸素が薄いきびしい環境の中で人力だよりの重労働で、食事は限られたものしかない、風呂には入れないなど、ストレスがたまり作業員同士でケンカをすることも多々ありました。また世代交代と登山道整備事業が途絶えたことが重なり、登山道整備をする後継者がいなくなり人捜しに苦労した時期もありました。

この機会に、そんなきびしい環境の中でみんながどんな思いで働いていたのか、その時の人間関係など当時の体験談や苦労話を、職員からかわるがわる紹介します。（FN）



写真1 白山の強力たち

登山道整備の一日

室堂に泊り込んでの登山道整備です。夏だというのに朝晩はとても冷え込み布団から出たくありませんでした。食料は後輩たちがボッカで運んでくれた缶詰やカップラーメン、お茶やビールなどです。携帯の電波もつながらず、テレビも見れない、風呂無し、洗濯機無しトイレもポットン便所、朝はトイレでゆっくりしたいタイプの自分には特に苦痛でした。

こういった環境のため、朝は明るくなったら仕事を始め、昼はごはんを食べ昼寝、夕方暗くなり始めたら仕事を切り上げそのまま夕食、室堂の消灯時間が来たら就寝、また明るくなったら仕事といった生活の繰り返しでした。その時は、空輸された木材の運搬や人力による掘削がメインだったと思います。ただ、標高がとても高く酸素が薄かったため、こまめに休憩しないと仕事どころではありませんでした。下界とはかけ離れた生活でしたが、一度こういった生活をするのもいい経験になると思いました。会社の先輩に以前、室堂まで毎日通っていたという人が居ます…考えられません！（SS）

ずぶの素人が石屋さんを超えた

登山道に光ケーブルを埋設する仕事をした頃の事、あまりの過酷さに、2週間以上もった人はほとんど居なくて、1週間～2週間で大抵の人は辞めていきました。中にはたった2日で仕事を辞め、帰って行くような人も居ました。

白山での仕事は、人力だけがたよりの厳しい仕事で休みに下山すると、もう仕事に上がってこない人もたくさんいました。仕事のストレスや食事のストレスなどから毎晩のように仲間割れがおきたこともありました。



写真2 石張り作業

時には兄弟や友達、地元の大学生・高校生たちに、現場に来て手伝ってもらい何とか完成させました。

そんな状況の中、白山の仕事に情熱をもやしてくれた二人(H、Y)の青年がいました。彼らは、登山道整備はずぶの素人でしたが、毎年3か月間白山にこもり力をつけていきました。そんな二人の集大成の仕事が、白山奥宮祈祷殿から



写真3 完成した石張工（白山山頂へ続くお池めぐりコース）

から白山山頂（御前峰）に向かうあのすばらしい白山式石張です。完成した時、「ずぶの素人が石屋さんを超えた！」そう思いました。

あの石張りを完成させるため、みんなで石を捜すことからはじめ、険しい壁を登り少しでも良い石を集めました。突然雷雨に見舞われ壁の石が崩れ、集めているすぐ手前で止まり命拾いをした経験もありました。

二人は妥協せず来る日も来る日も石の面を揃え、石を割りきれいに並べていきました。10月になり室堂の小屋も閉まり、雪がいつ積もってもおかしくないようになり、会社を上げて作業を行い、完成させました。彼らの技術のすばらしさは、現在もその石張りがそのままの状態に残っていることで分かります。(Y N)

展望歩道整備の思い出

入社前に高校生でアルバイトで仕事をしていた時、特に思い出にあるのが、展望歩道での木柱土留めの整備です。登山道を横幅 1.8m・深さ 1.5m に床掘りし、丸太杭（径 0.2 m 程度・長さ 2 m）を砂防堰堤形状に 9 本並べ降雨時に登山道の土砂が下流に流出・洗堀を防止する構造でした。

当初、丸太杭を打込むとされていましたが、白山ではそんなことは通用せず、打込みを行っても転石等にぶつかり入っていく状態ではありません。

それで丸太杭を並べることとし、人力でスコップ・金てこ等を使用し少しずつ崩しては掘りあげる作業を繰り返して、深さ約 1.5m を目指し、幅員はなるべく無駄の無い幅にする床掘を行うことになりました。

しかし、深さ 1m になるとスコップの柄が床掘した土の壁に当たり掘りあげることが出来なくなり（図 1）、困っていると、スコップ・金てこ等で崩した土砂を掘りあげるのに上半身を穴に入れ、お汁用茶碗を使用し掘りあげる方法（図 2）が一番早く掘りあげられる事を教わりました。

床掘を行う時、その位置の早い段階で大きな転石が出てきた場合は床掘位置を変えるなど対応が出来るのですが、1m 程度掘りあげ転石が出てくると泣けてくるくらいでした。

取りあえず金てこで突いてみて、軟らかい転石の場合は少しずつ叩き割って取り除き、硬く大きな転石の場合は止むを得ず

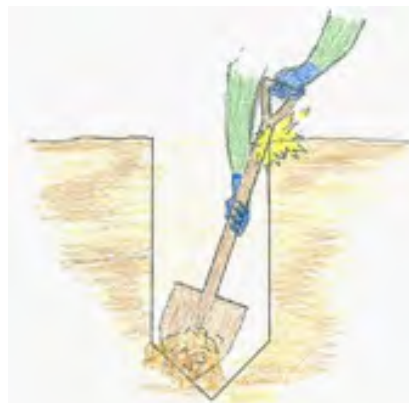


図1 スコップによる作業



図2 「お椀」を使って掘る

場所の変更を行いました。

登山道の仕事は、土砂を確保する事も大切でした。床堀を行った土砂も構造物の上流側に置く必要がありました。床堀作業を行うにしても下流側に置いた方が楽で仕事も早いのですが、ひと雨降ると土砂が全て流され埋戻す土砂が無くなります。施工時期は夏場で、この当時白山では夕立が良くあり、夕立があった次の日はせっかく掘った穴が埋まってしまう事が多々ありましたが、流れた土砂を集めることを考えれば、土砂で埋まった穴をもう一度掘る方がましでした。

土砂が不足すれば、周辺の影響のない場所から土のう袋に詰め、背負子に縛り人力で運搬するか、それでも足りなければ空輸による運搬となり、それは設計にもなく大ごととなります。それだけ土砂の扱いには神経を使いました。(K B)

空輸大作戦

登山道の物資は基本的に歩荷^{ほっか}をするか、かなりの重量物や量になるとヘリコプターによる空輸になります。登山道に使用する石は現地^{まかな}で賄えないものは空輸で補充します。しかし、むやみにどこでも置くことができず、なるべく植物への影響の無い箇所、道^{みち}が塞がらない様な広い箇所と限られてくるので、入念に下見をして場所を選定し、必要な数量などを決めていきます。また、一般の登山者がいると空輸ができないので、基本的に早朝になり、朝がとにかく早くて起きるのがすごく辛かったです。

どうしても日中になる場合は、荷卸し場の上下で登山道を閉鎖し、登山者を止めながら空輸を行います。場内移動があるときはとにかく忙しくて、荷を掛けては次の箇所へ猛ダッシュの繰り返しでヘトヘトになります。また天候にも大きく左右されるので、それぞれの位置に皆が待機して無線で連絡を密にとりながら登山者を通したり止めたり、天候の状況をヘリに報告しながら作業を進めます。実際に荷受けや荷掛けをするときはヘリの風圧をもろに受けるので、荷掛けのフックが掛からなかったりすると時間も限られるので焦りがつります。

空輸作業は荷受け荷掛けする者だけでなく誘導者、ヘリコプターの機長等、危険が隣り合わせなので、みんなが一つになって協力しないと安全にできない仕事でした。(T T)



写真4 ヘリコプターによる空輸

百四丈滝展望台修繕で死にかけた話

加賀禅定道の入り口から7～8kmほどの所にある、百四丈滝展望台の修繕の時です。工事内容は展望台の修繕ですが、展望台はかなり痛んでおり、ほとんど木材で新設するようなものでした。しかも秋は各現場の仕上げの時期でもあることや、ヘリコプターの日程の関係から現地での作業が可能な日が1日だけとなっていました。足の早い人でも3～4時間はかかる登山道の往復に加え、上で展望台を作る工程を一日でやろうと言うのだから恐ろしい会社です。すでに嫌な予感がしていました。

加賀禅定道を登ったことの無かった自分は、知り合いから「距離的には別当出合から白山室堂に行くくらい。素敵な道で私は好きで5、6回は行っていますよ。」と聞き、別当出合から室堂なら高校時代に週に5回登っていた自分は「それなら楽勝だな！」と安心しました。しかしこの言葉が自分をどん底に追い詰める引き金となったのです。

安心し油断しきっていた自分は、わずかの飲み物とおにぎり、そして非常用のテント2張りを担ぎ、精鋭メンバーといっしょに朝3時頃に事務所を出発しました。歩き始めはまだまだ楽勝で、どれだけでも歩けそうな感覚でした。しかし1時間半ほど経ったあたりから、様子がおかしいなと思い始めます。登りが急すぎる上に、その登りを登りきると必ず急な下りがあり、これではいつまで経って

も展望台にたどり着かない、そう思うようになりました。

極めつけは、この登山道を通ったことがあるメンバーに「ここでまだ半分くらいかな？」と言われ、一気に追い詰められました。別当出合から室堂まで1時間半ほどで登っていた自分には、まだ半分ある現実を受け入れられず、2時間を超えたあたりからいよいよ足が悲鳴を上げだしました。2時間半を過ぎたあたりでようやく避難小屋が見えました。ここから現場までは、ほどほど近いということを知り、かなり足にきていた自分は非常用のテントを避難小屋において、ラストスパートをかけました。そこから30分ほどで展望台に到着しました。そこからの眺めは確かにすばらしいものでした。同時に「この景色を見たい人が果たして何人ここにたどり着けるだろう。」とも思いました。

空輪も無事終了し、作業自体は特に問題なく終了しました。若いという理由で選ばれた自分以外は登山道整備の精鋭を集めただけあり、現地条件に合わせ臨機応変に対応し、素早く作業を進め、9時頃に始まった作業は15時頃にはヘリコプターでの荷降ろしまで終了しました。段取り八分とよく言いますが、その通りだと感心しました。

作業終了後、早く下山しないと日が暮れてしまいます。急な登りは下るのも大変で、落ち葉で滑ることも併せ、かなり危険な下山でした。登山と作業でプルプル震える脚で、ちょっと踏み外すと谷に転落しそうな細い登山道を下っていきます。踏ん張りが利かず、尻で滑り降りる場面もあったほどでした。しかも厄介なのが、登山のときの登った後の急な下りが、下山のときは急な登りになるので、これが地味にきつく体と心にこたえました。

さらに、登る前に油断しきっていた自分は、大食漢にも関わらずおにぎりを4つしか持っていっておらず、それをヘリの待機中に2つ、昼休憩に2つ食べてしまっていました。下山の途中ついに腹が減り、途中で水も飲み干しました。子供の頃から腹が減ると何も出来なくなっていた自分は、下山の中盤くらいから脚の疲労と空腹でかなりの極限状態になり、地面に落ちている葉っぱを食べようかと思いましたが、たいして腹が膨れないだろうと思い断念したほどでした。

いつの間にか最後尾まで下がり、ギリギリ前の人が見える位置で粘っていましたが、ついに日も暮れ始め、寒さと空腹が襲い掛かってきました。その時、「人ってこうやって遭難するんだ。」と思いました。半分あきらめかけながら、何とか踏ん張り歩いていくとようやく最初に見た景色らしきものが見えてきて、最後は転がり落ちるかのようにして駐車場にたどり着き、ようやく安どしました。メンバーの一人が魚肉ソーセージをくれると、すぐさまほお張りしました。命の味がしました。(TN)



写真5 百四丈滝展望台の修繕



写真6 展望台から見た百四丈滝

登山道工事の醍醐味

初めてこの仕事に携わったときは世の中にはこんなに辛い仕事があるのかとよく思いましたが、仕事をしていると登山者の方から「いつもありがとう！がんばってね！ご苦労様」とねぎらいの言葉をかけてもらい、こんなに感謝される仕事があるんだと感動しました。登山道に携わってから何年も経ちますが、辛かったことより楽しかったことの記憶の方が多く、またその時の経験が今の自分にも生かされ、登山道整備に関わることができ本当に良かったなと思います。たくさんの人に出会い、過酷だけどその人たちと協力して一つのものを造る。疲労感もあるけど完成した時の達成感と満足感が大きく、それこそが登山道工事の醍醐味なんだと思います。(TT)

センターの動き（平成 29 年 3 月 1 日～平成 29 年 7 月 28 日）

- | | | | | | |
|------|----------------------------------------|--------|-------|---------------------------------------------|---------|
| 3.3 | 白山国立公園生態系維持回復事業検討会 | (白山市) | 5.28 | 白山まるごと体験教室「スペシャルガイド
ウォーク 小動物の暮らしを探る」 | (中 宮) |
| 3.3 | 白山火山防災協議会 | (県 庁) | 6.3～4 | 白山林道ウォーク | (中 宮) |
| 3.7 | 白山ユネスコエコパーク協議会
第 27 回WG 会議 | (白山市) | 6.15 | 白山火山防災協議会 | (県 庁) |
| 3.9 | 手取川濁水研究報告会 | (野々市市) | 6.17 | 県民白山講座
「白山登山と高山植物の集い」 | (白山市) |
| 3.12 | 市民登山教室白山登山講座 | (白山市) | 6.21 | オキナグサ保護活動 | (白山市) |
| 3.15 | 第 6 回白山火山協議会 | (白山市) | 6.24 | 白山自然ガイドボランティア研修講座第 2 回 | (市ノ瀬) |
| 3.22 | いしかわレッドデータブック策定委員会 | (県 庁) | 6.25 | 白山奥山ワーキング白山外来植物除去作業
「採って楽しむオオバコ茶 in 市ノ瀬」 | (市ノ瀬) |
| 3.27 | サドクルマユリ報告会 | (白山市) | 6.28 | 生態系維持回復事業委員会 | (金沢市) |
| 4.15 | 白山自然ガイドボランティア研修講座第 1 回 | (本庁舎) | 6.29 | 白山火山防災訓練 | (白山市ほか) |
| 4.19 | 白山自動車利用適正化連絡協議会総会 | (本庁舎) | 6.29 | 白山ユネスコエコパーク協議会
第 30 回WG 会議 | (南砺市) |
| 4.20 | 白山手取川ジオパーク推進協議会総会 | (白山市) | 7.1 | 北陸病害動物研究会 | (金沢市) |
| 4.28 | 中宮展示館開館 | (中 宮) | 7.3 | 第 12 次鳥獣保護管理事業計画会議、
イノシシ、シカワーキング会議 | (県 庁) |
| 4.29 | 楽しもう！白山麓 days
～ 5.8 「春の中宮カタクリ days」 | (中 宮) | 7.8 | 外来植物除去作業ボランティア研修講座 | (白山市) |
| 4.29 | 市ノ瀬ビジターセンター開館 | (市ノ瀬) | 7.9 | 石川県里山クマフォーラム | (金沢市) |
| 5.7 | ブナオ山観察舎閉館 | (尾 添) | 7.10 | 石川県特定鳥獣管理計画検討会 | (金沢市) |
| 5.19 | 国別研修 (ベトナム) | (市ノ瀬) | 7.15 | 楽しもう！白山麓 days
～ 23 「夏の中宮水遊び days」 | (中 宮) |
| 5.21 | 外来植物除去作業ボランティア研修講座 | (白山市) | | | |
| 5.22 | 白山林道ウォーク実行委員会 | (白山市) | | | |
| 5.23 | 白山野々市鳥獣害防止対策会議 | (白山市) | | | |
| 5.24 | 白山麓別当谷安全対策協議会 | (白山市) | | | |



白山まるごと体験教室「スペシャルガイドウォーク」。中宮展示館観察路において、職員がそれぞれの専門を活かした解説を行い、小動物や昆虫を探しました。



白山奥山ワーキング外来植物除去作業「採って楽しむオオバコ茶」。雨の降る中、オオバコの除去を行い、最後にオオバコ茶も味わいました。

たより

今年が白山開山 1300 年であることを記念し、本誌においても登山道に焦点を当て、「白山登山道のあゆみ」として、特集号を組むこととしました。禅定道と呼ばれた古道に起源をもつ、白山の登山道の歴史をその登る目的に焦点を当てふりかえるとともに、当センター所長が白山の禅定道をはじめ、登山道の開設からその後の移り変わりを紹介しています。また、竹腰永井建設の皆様には、登山道の整備を業としている立場から、その苦労話を書いていただきました。登山道の整備は、昔も今もその大変さには変わりはありません。

千年以上の歴史がある白山の登山は、今と昔では大きく様変わりしました。装備もろくになく立派な登山施設もない昔の登山は、大変であったことに間違いありません。その先人の苦労を思いつつ、白山に登ってみるのもよいことではないでしょうか。人が山に登るのは、俗世間とは違うものに触れ、経験することに今も昔も変わりありません。(小川)

はくさん 第 45 巻 第 1 号(通巻 180 号)

発行日 2017 年 7 月 28 日 (年 3 回発行)
印刷所 前田印刷株式会社

編集・発行

石川県白山自然保護センター
〒 920-2326 石川県白山市木滑ヌ 4
TEL.076-255-5321 FAX.076-255-5323
URL <http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/>
E-mail hakusan@pref.ishikawa.lg.jp